

東日本大震災から四年半が経った今年の夏、私は初めて震災後の東北を訪れた。今回被災地に足を運ぼうと考えたのは、今の被災地の状況をこの目で見に行き、また地震、津波を体験した方々の生の声を聞きたいと思ったからである。私たちスタ学メンバーは8月3～4日の二日間、岩手県釜石市の甲子 B 仮設に訪れ、そこで縁日という形でイベント開催をさせていただいた。当日の開催にあたって数ヶ月前から地元の方々と連絡を取り、こちらからの提案に多くのご協力をいただいた。縁日ということでたこ焼きやカキ氷、射的などの出し物をし、規模こそ大きくなかったものの地元の方々からは「童心に返ることができて楽しかった。」というお声をいただき、また近所の小学生もとても楽しんでくれた様子で笑顔が絶えなかった。また私たちは今回事前に“釜石よいき”という釜石の人々に馴染みのある踊りを動画で見て練習し、一緒に踊ることができたらと考えていた。当日浴衣を着た私たちはぎこちない動きではあったが躍らせていただき、みんなで盛り上がることができた。もう一つ地元の方々と交流を深めることができたのは合唱である。仮設の住民の方々が集って活動している合唱団があり、今回3曲ほど一緒に歌わせていただいた。全員で作上げたというのが感じられる瞬間であり、初めてお会いした方々だったが、交流を深めることができた。このイベントを開催するにあたっては仮設にお住まいの方々、社共の方々など多くの方々にご協力をいただき、とても良い交流の場を持つことができた。

今回このイベントを通して、現地では今でも仮設住宅で暮らしている方がいるのだと分かったと同時に、仮設に住んでいる方々はとても強いつながりがあるということを感じた。さらに今回お世話になった方の中には以前甲子 B 仮設に住んでいて、今はすでに転居してしまった方もいたが、わざわざ仮設まで足を運んでくれた方もいて、今でもつながりがあるというのが分かった。東京に住んでいる私は正直近所との関わりはほとんど無く、まさに今社会問題ともなっているコミュニティの希薄化であり、東京など特に首都圏でこのような状況は多いのではないか。それに対して仮設住宅というのは、4年半前の震災で厳しい状況を共に乗り越え、助け合って共に過ごして来た時間があり、普通に生活している経験できない人との関わり、交流をしているのだ。現在の仮設にお住まいのある女性とお話させていただく中で、「震災が無ければ出会わなかった人が大勢いて、いまこうして一緒にいることも不思議な気持ちなのよ」という言葉がとても印象に残った。そしてそれは私たちも同じで、このような機会が無ければ岩手県釜石市を訪れることも甲子 B 仮設の人々に出会うことも絶対無かったと思う。震災により多くの悲しみが生まれたが、同時に新たな出会い、結びつきも生まれたのだと分かり、この関係は大切にしていかなければならないと感じた。

しかし震災から4年半が経った今新たな問題が発生している。それは仮設から復興住宅などへの転居に伴う、新たなコミュニティの形成である。今回私たちが訪れた岩手県釜石市甲子仮設は来年の夏で撤去され、現在の住民の方々はそれぞれ他の場所に移ることになっている。今の仮設での結びつきというのも4年半という長い時間をかけて築かれてきたものであり、やっと落ち着いてきたときには別の場所に移り、また新たなコミュニティを

築いていかなければならないのだ。これも実際今回お話をさせていただく中で分かったことである。慣れない環境でストレスを感じてしまう人もいるかもしれない。特に一人暮らしの方などは頼れる人や、相談できる人がいない場合がある。そこで必要なのはボランティアなどのサポートなのではないか。現在すでにその活動をしている復興コーディネーターという人々がいる。役割としては仮設住宅の場合と変わらず、住民どうしで関わりを持ってもらうためにイベントを行うことである。もう一つはまちづくり議論の場を設けることである。行政だけがまちづくりを担うのではなく、住民自ら自分たちの地域のことを考え、コミュニティを形成することで、結びつきが強くなるからだ。これを実践する上で行政側と住民側の橋渡しとなるのが復興コーディネーターなど外部のサポートである。住民の相談を受け精神的な支えや、イベントを通して住民同士が交流し結びつきを深めるお手伝いはもちろんのこと、住民が自ら地域づくりに参加し意見を取り込めるように調節していくという役割は第三者だからこそできることである。

私はボランティアに行くまでは正直不安と迷いがあった。今回仮設住宅でイベント開催ということで行かせていただいたが、私の中の被災地のボランティアのイメージとは少し違ったこともあったからだ。しかし今回実際に行って生の声を聞き、今の被災地のニーズを知ったことで、今回のような活動は必要なものであり、これからも続けていくべきことなのだとわかった。初めは被災家屋のがれき除去や清掃、泥だし、土砂の袋詰め、田畑や河川の土手のがれき除去、救援物資の仕分け作業、避難所の環境改善、写真整理、イベントの補助、草刈りなどの力仕事を中心としたボランティア活動が求められていた。その後、仮設住宅などでの生活等に移ったなかで、被災者の生活支援、買物支援、調理支援、(設住宅などの環境整備、安否確認、孤立防止などの活動が中心となっていった。そして今仮設住宅から復興住宅などへの移住に伴い、先に述べたようなボランティア活動が求められている。被災地のニーズは大きく変化しているのも、やはり実際に行かないと分からなかったと思うし、学ぶことは多くあった。

また私たちは仮設住宅とは別に、釜石にある創作農家こすもすさんのもとにも訪れ、バンガロー設営のお手伝いや広場の環境整備などを手伝わせていただいた。その公園は震災後復興のためにコンサートなどのイベントを開催したり、子供たちがのびのびと遊び、いろいろな体験ができるような環境を作っている。公園には手作りの遊具があったり、壁には大きな絵が一面に描かれていたりとても居心地の良い場所であった。それらの施設は創作農園こすもすのスタッフさんをはじめ、復興のためにもこの公園に貢献したいという人々によって完成され、多くの子供たちなどが利用しているようだ。また私たちのような学生などのボランティアもしばしば訪れているようだ。私はそこのイベントなどの写真を見せていただき、どの写真も子供たちをはじめ、そこに写っている誰もがとても良い自然な笑顔だったのがとても印象的で、この笑顔を引き出すためにたくさんの方が協力して公園を作り、イベントを開催しているのだと感じた。

今回釜石へ行き、地元の方と関わらせていただいたことで、これからの被災地について

深く考えるきっかけにもなり、また今自分たちにできることを明確にすることができた。それは人と人のつながりのサポートをすることだ。これから復興住宅などでの新しいコミュニティ形成をサポートし、結びつきを強めるお手伝いをしたいと考えている。また仮設住宅は無くなってしまいが、そこで生まれた結びつきをこれからもつなぎとめる何かしらのお手伝いなどもできたら、ということなどニーズに合わせた活動をしたい。そして自分たち自身も地元の方々との出会い、関わりを大切に、今回と同様色々なことを学びたい。